

# 平成 27 年度「グローバルライフ」実践報告

横瀬友紀子 後藤巻子 石田光枝 塗田佳枝  
吉田賢一 深澤孝之 仲本佳子 建元喜寿  
對崎加奈子 渋木陽介 今野良祐 熊倉悠貴

SGH に指定され、2 年目を迎えた。SGH カリキュラムにおける基礎科目である「グローバルライフ」も 2 年目となる。本科目は「家庭基礎」をベースとし、国際化を身近な課題として意識させ日常生活から世界とのつながりを感じられる授業を目指し、家庭科と他教科との連携を図りながら開発している。昨年度の試行的な取組をふまえ、今年度は「私たちの生活と消費行動全般について世界とのつながりを考える分野」、「衣分野」、「食分野」を中心に学習内容を構成した。今年度は質問紙調査を実施し、生徒の変容から授業内容の評価を試みた。

キーワード S G H 地球市民性 グローバルな視点

## 1. はじめに（設置の背景、昨年度からのあゆみ）

生活のあらゆる場面でグローバル化が進んでいる近年、生活上の課題や地域社会の課題の解決について考えていく中で、海外とのつながりを無視することはできない。しかし、私たちは日常生活の中でそれらを意識しながら生活することはあまりない。このような日常生活の中から地球市民としての気づきを促し、隣の国・遠く離れた国で起きていることは、私には関係ないではなく、私にもどこかでつながっているということ意識させ、これからの暮らし方について考えさせたい。これが本科目の目的である。

SGH 指定前の本校ではこれまでに、国際的分野に関心をもつ生徒の偏り、国際的な行事や取り組みについて校外学習を除くと全体にゆきわたっていないことが問題点として挙げられてきた。まずは自分と関係のあることとして生徒にとらえさせることが、「グローバルライフ」の使命でもある。

本科目は、これまで 1 年次必修科目として 2 単位で開講していた「家庭基礎」を発展させた学校設定科目である。「家庭基礎」のねらいである「生徒が自分の生活を見つめ、これからのより良い暮らし方・生き方について考える」という家庭科の要素はそのままに、私たちの生活と社会とのつながりをグローバル課題から気づかせることで、身近な課題から国際的な課題を考察させることを目指している。また、3 年次に取り組む卒業（課題）研究を見据えて SGH 基礎科目としての意識づけや動機づけを行う役割も求められている。

H27 年度の取組がより良いものとなるよう、平成 26 年

12 月からワーキンググループを立ち上げ、様々な教科の教員と協力しながら授業内容について何度も話し合いを進めてきた。様々な授業内容が検討された結果、今年度は家庭科分野として「衣」「食」についての題材の他に、家庭科でよく取り上げる題材のみにとらわれず「世界と私たちの生活がつながる題材」を通じて消費行動を考えさせるなど柔軟に取り組んでみようという方向性が定まった。

## 2. 学習目標の設定

昨年度の試行をふまえ、学習指導要領にある「家庭基礎」の目標に地球市民性を育むための、

- ・日常生活の中から世界とのつながりを意識させること
- ・地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせること

という 2 点を加え、グローバルライフの学習目標を次のように設定した。

「人の一生、生活に関する学びを地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせる。家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得していく中で、日常生活の中から世界とのつながりを意識し、自分の生活、家庭、地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」

さらに、生徒に身につけてほしい力を次のように設定した。「日本と世界とのつながりを理解し、これからの自分の生活を創造するための 3 つの力を身につける」

- 1) 想像できる力
- 2) 問題を発見できる力
- 3) 自分の考えを他者に伝えられる力

### 3. 授業構成（※資料1）

#### 1) 学習分野の精選

今年度は、「私たちの生活と消費行動全般について世界とのつながりを考える分野」、「衣分野」、「食分野」を中心に学習内容を構成した。本来の「家庭基礎」における学習内容は多岐にわたるが、地球市民のひとりとして生徒が主体的に考えるための動機付けには、じっくりと時間を与えて考えさせる必要がある。そのため、家庭基礎で身につけさせたい概念などをふまえつつ、生徒が実感しやすく発展的に考え続けることのできる分野に絞った。本科目では、授業で扱う題材をきっかけにこれからの生活について生徒が“自分のこと”としてとらえ、身近なことから考え続けることを願い、題材を選定した。

#### 2) 自国の生活文化の扱い

グローバル人材（地球市民）としての意識や視野を持たせるためにも、日本以外の国々とのつながりに加え、“私・日本”を考え、“他者・他国”との比較によって再考することで、他者理解、自己理解が充実すると考える。そのため、高等学校家庭科学学習指導要領の改善の具体的事項にもあるように、日本の生活文化についても基礎的な範囲で扱い、日本人としての自分、日本に住む私として生活文化を見つめ直す機会を設けた。

#### 3) 自分の生活を見つめる視点を重視した構成

本科目開発では、“他人事にしない”“身近に引き寄せて考える”ことを重視している。そのため、普段当たり前すぎて考える機会のない自分の生活について、もう一度立ち戻って考える機会を大切にしたい。

「私の生活」を見つめ直し、「私の生活」が「社会・世界」とどのようにつながっているのかを知り、そしてもう一度これからの「私の生活」を考えるという流れで構成した。

#### 3) 昨年度を取組をふまえた変更点

◇1学期の視野を広げる分野として水とパーム油を題材とし実施したこと

1学期は、生徒が世界に視野を広げることをねらいとし、

題材として水とパーム油を選定した。日本に住む生徒にとって豊富で身近にあるが、地球規模で考えれば希少性の高いものである水、身近にはあるが身近であることに気付きにくいパーム油というどちらも我々の生活に欠かせないものである。その2つから世界とどのようにつながるかを意識させた。

◇「衣」分野を新たに加え、ディベートによって生徒自ら考える活動を取り入れたこと

2学期は、生徒の生活にとって身近な「衣」「食」分野から日本の現実・世界の現実を知ることのねらいとした。日本で起きていること・私たちの生活が世界とどのようにつながっているのかについて、特に衣分野においては、ディベート活動を行ったことで、生徒が主体となって考え発言することや自分で調べて考え、クラスメイトと共有する時間を多く設けられた。

◇「食」分野では昨年の実施をふまえ、文化理解の要素と食品ロスを通じた問題提起の要素で構成したこと

昨年度は限られたクラスでのみ実現した交流が、今年度は全クラスで実施できた。姉妹校のインドネシアの高校生との交流を通じて異文化にふれることを切り口に、改めて日本の食文化について見直す機会とした。また、地球規模で考えることを意識させるため、世界の食糧問題と日本の食品ロスの問題を併せて考えさせた。

◇世界で調査研究している研究者による、私たちの生活とつながるグローバルな課題を考えさせる講義

地球規模で起きている問題と自分の生活が結びつくことを、授業者ではない研究者が気付かせるねらいで行った。講師は、本校前校長である中村徹先生にお願いした。3年次に取り組む卒業（課題）研究へとつながるよう調査研究の方法、研究の視点、研究のおもしろさについても話してもらった。

### 4. 授業の実際

#### <1学期>

世界とのつながりを知り視野を広げる段階と位置づけた。当初は、さまざまな題材を組み込むことを検討したが、生徒の発達段階や消化不良になってしまうことなども考慮し、水とパーム油に題材を絞り実施した。

#### ・「グローバルライフ」ガイダンス

初回の授業でガイダンスを行い、科目の位置づけ、養いたい力、評価について説明した。初回にはグローバルライフは英語の科目だと勘違いし、英語の教科書を持参する生

徒もいた。今までに受けたことがない科目であるため、何を学ぶのか少し戸惑いつつも真剣に聞く姿がみられた。

昨年度は年度途中からの実施であったため、グローバルライフになり、家庭科という科目からイメージする内容である保育や被服などができなくなってしまうと困惑している生徒の様子を感じたが、今年度の生徒にそのような戸惑いはなかった。おそらく入学してから様々な場面でSGH校として話を聞く機会があったことや、SG入試を経てSGクラスとして入学した生徒がいるなど、昨年度の生徒とは環境が異なっているためではないかと考える。

しかし、毎回の授業で目標や学ぶ意義などについては、今年度においても丁寧な説明をし、理解に努めていくこととした。

#### ・水から私たちの生活と世界を考える

1) より美味しく手軽に飲みたい、美容にも活かしたい、備蓄にも役立てたいという消費者のニーズから身近になったボトル水とそのCMから消費行動を考えさせる。2) 人間の体組成や生活行為における水の消費量から私たちの生活に欠かせない水について気づかせる。3) 世界の水事情を通じて水が希少性の高いものであることを気づかせる。4) 私たちが食べているものがどれだけの水を消費してできているかを“バーチャルウォーター”から考えさせ、私たちの消費行動が世界につながっていることに気づかせるという4点をねらいとした。

蛇口をひねれば水が出る、いつでもどこでもボトル水などを購入できる日本では、水が貴重なものであることに気づきにくい。安全で美味しい水があるのが当たり前ではないということにまずは楽しみつつも気付くことができるように、水の飲み比べや生活に使用する水の計算、水を汲みに行く少女が背負う水の重さの体験なども取り入れる工夫をした。

世界へ視野を広げるうえで難しかったのが、世界の水事情についての取組である。開発教育の教材をもとに水について困っている世界の国々について生徒が調べながら学ぶ方法をとった。各国の水問題について共通する傾向はあるもののそれぞれの抱える問題は異なり、なかなか解決策の見いだせないものでもある。短い時間では、問題を知るととどまってしまった。進め方については改善の必要がある。

#### ・パーム油から私たちの生活と世界を考える

1) パーム油について PARC 制作の VTR や DEAR のすぐろく教材を用いてパーム油生産者の過酷な労働環境に

目を向けさせる。2) 私たちの身の回りにあるパーム油製品を示し、私たちの生活に欠かせない植物油脂であることを理解させる。3) パーム油生産がもたらす生産地環境への影響と、パーム油をめぐる保全活動の紹介と私たちができることを考えるという3点をねらいとした。

パーム油の生産が環境へ負荷をかけている側面もあることを伝えるため、昨年度、生徒の反響が大きかった某チョコレート菓子メーカーに関する動画やアブラヤシプランテーションの現地写真を用いて考えさせた。そして、VTR やすぐろく教材によってパーム油生産者のおかれている状況にも目を向けさせることを試みた。だが、生徒には一定のインパクトは与えられたものの、自分の生活に引き寄せて考える点では課題が残った。身近であることに気付きにくい題材であることを考慮した授業展開の一層の工夫や“私たちができること”を考える時間をもう少しとするなどの改善が必要である。

#### <2学期>

衣生活、食生活から世界とのつながりを考えることとし、より具体的なものを通じて世界とのつながりを意識しながら自分の生活を考える段階とした。

#### ・私の衣生活と世界とのつながり

1) なぜ服を着るのか、クラスメイトの着装はどうか、といった問いをもとに生徒が普段着ている服から、より身近なものであることに気付かせる。(自分自身の生活に引き寄せる) 2) 安価な労働力を用いて生産される衣類の現状について生徒自ら情報を収集し、ディベートを通じて、自分の考えをもつ(世界とのつながりを考える)ことをねらいとした。

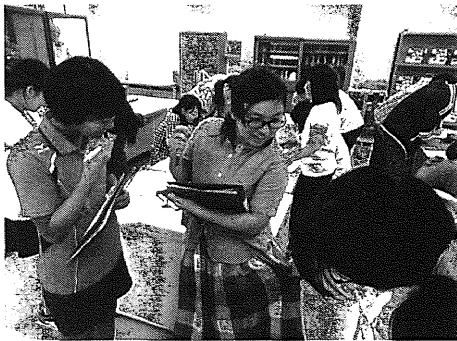
具体的には、生徒が持参した私服を着用し相互インタビューなどを通じて着装や衣材料について学び(4時間)、「ファストファッションは私たちの生活に必要なか、不要か」についてディベートを行い(7時間)、ディベートでの議論をもとにした教員による講義「ファストファッションの光と影・エシカルファッションとは」による振り返り(1時間)という構成とした。

制服を着て授業をすることが決められている学校で私服を持参するということは生徒にとってとてもワクワクする機会だったようである。しかしそれ以上に印象に残っているのがディベート活動やその後の振り返りの講義だったと感想に書く生徒が多かった。

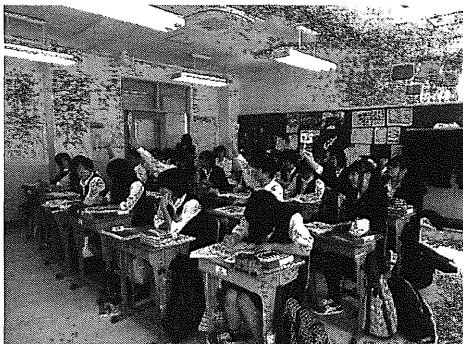
前年度末のワーキンググループでの話し合いで、ファストファッションを取り上げるときには影の部分のみ取り

上げるのではなく、光の面も取り上げるべきだという意見が挙がり、両方がバランスよく扱われるよう配慮することとなった。

22 期生はキャリアデザインの中でディベートを経験している学年であったことや、ファストファッションを題材とすること、物事を多面的にとらえ自分の考えをしっかりとつためにもディベートが有効であると考えた。5 人グループを 8 つ作り、必要側と不要側に 4 グループずつ振り分け、全グループ 1 度だけ対戦することとし、クラス全体として 4 回戦する。各回は合計 25 分のミニディベートとした。お互いのディベートの様子・他者の意見を聴衆として知ること大切な活動と位置付けた。



(写真) 私服で相互インタビューの様子



(写真) ディベートの様子

#### ・インドネシア コルニタ生との交流

今年度は、11 月にインドネシアのコルニタ高校（以下コルニタ高校）から 6 人の留学生を迎える機会があった。

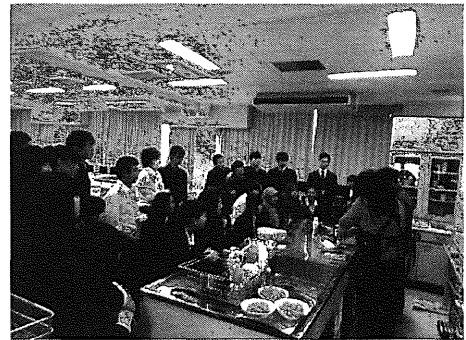
3. の 2) で述べたように、グローバル人材（地球市民）としての意識や視野を持たせるためにも、“私・日本”を考え、“他者・他国”との比較によって再考することで、他者理解、自己理解を促すためにも、インドネシアの食文化を知り、日本との食文化との共通点や相違点から、自国の食文化を考えるきっかけにすることをねらいとした。

コルニタ高校へ留学していた 19 期生の古井さんや現在もコルニタ高校へ留学中の本校生徒、筑波大学留学生のデ

キさんの協力も得て、当日までに準備してもらった。

授業では約 30 分間インドネシアの「食」についてコルニタ生にプレゼンテーションをしてもらい、その後、本校生徒とコルニタ生で日本の食べ物の好きなもの・嫌いなものなどを挙げてもらい互いの食の好みを比較した。次に、調理実習室へ移動し、ナシゴレンをコルニタ生に作ってもらい、試食した。

6 人のコルニタ生が 4 クラスに毎回ほぼ同じ内容で協力してもらうこと、いかにして言葉の壁を乗り越えつつ、異文化交流を 40 人規模でやるかが悩んだ点であるが、生徒はインドネシアに興味をもち、自国の食文化を考えるきっかけになったようである。



(写真) コルニタ生との交流 ナシゴレン作り

#### <3 学期>

本校は 2 学期が 11 月末で終わり、期末考査を終えてすぐに 12 月から 3 学期が始まる。食分野は学期をまたいでの実施となった。

内容としては食分野について引き続き取り組み、自分の生活から世界へと視野を広げ、最後に 1 年間のまとめとして、これまでの学習をふりかえり、改めてこれからの生活を考えることとした。

#### ・日本の食文化について知る～米食文化～

「食」分野は、家事が外部化する中でも作るという生活行為が現代においても残っており、身近に引き寄せやすい題材であるため、自分の生活や食文化を見つめつつ、世界へと視野を広げていくことをねらいとした。今年度は、食料自給率を学習の軸に据えて進めた。

生徒は各自「クッキング自給率」という農林水産省作成の無料ソフトを使い、栄養計算と食料自給率を算出し自分の食生活を振り返った。

次に日本人の食の現状について、食事の多様化、洋風化を栄養面から考えると同時に、日本人の食生活の変遷について食料自給率の変化にも注目させた。そして米の消費量の変化、生産の現状について取り上げ、米食を中心とした

和食文化にふれた。今年度は和食とは何かについて考える時間はあまりもうけられなかったが、和食献立の実習やコロナ生との交流から和食について見直す機会となったようである。

#### ・日本の食と世界とのつながり～食品ロス～

食分野のまとめとして、私たちの食の在り方を考えさせることをねらいとして、今年度も食品ロスを取り上げた。3. の3) で述べたように、地球規模の問題として日本の食生活の現状に気付かせたかったので、世界の食糧問題と対比させながら日本の食生活のあり方を考えさせることを意識しながら授業を行った。

また、昨年度の取組から、高校生の食事をつくる主体は保護者であることがほとんどであるため、冷蔵庫の中で食品ロスとなっていく食べ物があることについては、自分のこととしてはなかなかとらえにくかったのか、食品ロスにしてしまう人への一方的な批判が目立った。それをふまえ今年度は、自分の家の食品ロスに目を向ける工夫として、我が家の食品ロスになりそうな物を持ち寄り、セカンドハーベストジャパンへ寄贈するフードドライブに取り組むことを活動のひとつとして盛り込んだ。



(写真) 生徒が集めた我が家の食品

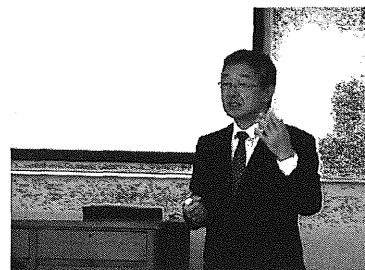
#### ・研究者による講義

世界をフィールドに調査研究している研究者を招き、私たちの生活とつながるグローバルな課題を考えさせたい。3年次の卒業(課題)研究につながる研究の基礎的な話を生徒にわかりやすく話してほしいと中村徹前校長にお願いし実現した講義である。

地球規模で起きている問題と自分の生活を結びつけて考えようと授業の中で伝えてきたが、授業者ではない研究者が話すことによって再認識させるねらいがあった。

中村先生は、モンゴルの沙漠化についてお話しくださった。我々日本人は沙漠化の被害者であるだけでなく、沙漠化をもたらす加害者でもあり、沙漠化は私たちが安い衣料品を求めるといった消費行動によって起こる地球環境へ

の影響でもあると学術的な根拠をもとにわかりやすく説明してくださった。中村先生の情熱あふれるお人柄とわかりやすいお話に生徒も教員も惹かれながら自分たちの消費行動について改めて考える良い機会となった。



(写真) 中村前校長による講義とその後のグループワークの様子

#### ・ふりかえり

ここまで何を学んできたかということを生徒自身が確認し、生徒自身がもう一度これからの自分の生活の在り方について考える機会を設けることは学習の定着においても重要である。

授業時間数に多少のばらつきがあり、全クラスで完全に同じ内容を実施することはできなかったが、どのクラスでも「1年間の学習の中で1番気になったこと」ごとに生徒が自由にグループをつくり、「自分も周りの人もHAPPYになるためにはどうしたら良いか」を考えることを課題とした。生徒同士が意見交換し考えるだけでなく、ムヒカ前ウルグアイ大統領のスピーチも紹介し、消費行動のあり方についても考える素材のひとつとして提示した。その後、各グループで発表し共有する時間を設けた。

## 5. 質問紙調査からみえる生徒の変容

1 学年 158 名の生徒を対象に、①1 学期終了時（7 月）②2 学期衣分野終了時（10 月末）③学年末（3 月）の時点において質問紙調査を行った。「世界とのつながりへの意識」「地球市民性の醸成」「日常生活への関心」「伝統的な生活文化への理解や姿勢」に関する質問項目を埼玉大学家庭科教育学研究室と開発した。「とてもそう思う」から「全く思わない」までの 6 件法を採用し、良い悪いどちらかに必ず分かれるように回答してもらうこととした。分析については筑波大学附属学校教育局 飯田順子先生にご協力いただいた。回答数については、回収できなかったものや未回答などもあるため、質問ごとに回答数が異なっている。

表 1 に示した結果についての生徒の変容と考察について述べる。

2 学期衣分野における取組では、ディベート活動における生徒の積極的な様子や感想用紙から生徒ができる範囲の中で身近に引き寄せて考えようとする姿勢がみられた。1 学期にはなかった積極的に考えようとする生徒の姿が印象的で授業者としても手応えを感じていた。

質問紙調査にはどのようにあらわれていたかを見てみる。衣分野に関わる項目のうち、「4. 自分の普段着ている服が、どこの国から来ているか（どこで作られているか）気になる」「6. 消費者が安さを追求することで、生産や流通に良くない影響を与えることもある」に注目すると、①1 学期（7 月）よりも②2 学期（10 月末）と③3 学期（3 月）において数値が上昇した。この 2 学期の衣分野では、安価な労働力を用いて生産される衣類の現状について生徒自ら情報を収集しディベートに臨んだ。その活動により、普段自分の着ている服がどこの国から

来ているかについて関心が高まったこと、先進国への安い衣料品提供がもたらす途上国の過酷な労働環境の実態理解について一定の効果がみられたといえるだろう。

食分野に関する「1. 自分の普段食べているものがどこから来ているのか、どうやって作られているのか気になる」「2. 日本の食文化を学ぶことは、世界の食文化を理解することにつながる」の項目は、③3 学期（3 月）において数値が上昇した。食分野は 2 学期 11 月以降～3 学期に実施し、日本の食生活が世界とつながっていること以外にもコルニタからの留学生との交流によって、自国と他国相互の文化理解の大切さが生徒に伝わったのではないだろうか。

学年末に行った 1 年間のふりかえりでの生徒の様子からは、自分のこととして考えようとする姿勢や意見が目立った。1 学期は一生懸命に考えたもののどこか他人事のような意見しか述べられなかった生徒たちが大きく成長したことを授業者として実感した。表 1 の結果と照らし合わせても「7. 私の暮らしのありかたを改めて考えてみようと思う」「8. 数は少なくとも、声は小さくとも私が何かを変えなければ、世界は変わらない」の項目が③3 学期（3 月）において上昇していることにもあらわれている。

目立った数値の変化がみられなかった「3. だし、和食など日本の食文化を大切にしたい」「5. 着物、和服など日本の衣文化を大切にしたい」自国の文化についての想いを問う項目については、食分野では日本の食文化について調理実習を 1 度行い、時間は少ないが扱ったものの、日本の伝統的な衣文化については、今回の取組では扱っていない。どちらの項目ももともとの数値が高いということも変化がみられなかった要因としてあげられる。同じく「9. 水も限りある資源である」も①1 学期（7 月）時点で得点が高い。

表 1 7 月、10 月末、3 月における得点の比較

項目	n	T1 (7月)		T2 (10月末)		T3 (3月)		F	多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD		
1 自分の普段食べているものがどこから来ているのか、どうやって作られているのか気になる。	145	4.31	1.19	4.41	1.04	4.90	.90	22.18 ***	1,2<3
2 日本の食文化を学ぶことは、世界の食文化を理解することにつながる。	143	4.63	1.06	4.55	.98	4.87	.91	7.68 ***	1,2<3
3 だし、和食など日本の食文化を大切にしたい。	145	5.30	.89	5.15	1.02	5.32	.92	2.39 †	
4 自分の普段着ている服が、どこの国から来ているか（どこで作られているか）気になる。	145	3.93	1.21	4.35	1.10	4.63	1.01	25.78 ***	1<2,3
5 着物、和服など日本の衣文化を大切にしたい。	145	4.98	1.09	5.02	1.13	5.12	.93	1.73	
6 消費者が安さを追求することで、生産や流通に良くない影響を与えることもある。	145	4.59	1.05	4.92	.91	5.12	.85	14.36 ***	1<2,3
7 私の暮らしのありかたを改めて考えてみようと思う。	145	4.70	.89	4.63	.96	4.99	.85	10.09 ***	1,2<3
8 数は少なくとも、声は小さくとも私が何かを変えなければ、世界は変わらない。	144	4.65	1.20	4.56	1.13	4.99	1.00	9.25 ***	1,2<3
9 水も限りある資源である。	145	5.49	.92	5.40	.94	5.54	.85	1.51	

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

生徒の変容から、特に2学期、3学期において「日常生活の中から世界とのつながりを意識させる」については、題材が有効にはたらくことで一定の効果がもたらされる可能性を感じられる。しかし、「地球市民性の醸成」については3学期において数値が上昇した。授業者の手応えとしても学年末のふりかえり活動にて生徒の“地球に暮らす1人として”の自覚が芽生えようとしていることが感じられた。このことから単発的な取組では地球市民性の醸成は難しいということもいえるだろう。

## 6. 課題と今後への展望

学年末におこなったふりかえり活動、ふりかえりのプリントには生徒が自分自身の生活を見直し、自分にできることを考えられるようになるなどの成長がみられた。

「今の私は安い服を買わざるをえない。でも、外国で作っている人たちのことを知ったから、よく考えてから買う」「将来農家になりたいと考えているので、輸入に多くを頼っている日本の状況を知り、この状況を変えたい」「食べ物の自給率が低いのに、日本は食品ロスが多いというのが気になる。まずは買い物に行くときに冷蔵庫を確認してから買い物に行くように気を付けている」決して他人事ではなく、今できることの中で背伸びをせずに、口先だけの考えではなく自分に引き寄せて考えられる発言や記述が目立った。生徒に1年間をふりかえってもらうと、初めは世界と自分はつながらなかったが・・・「自分と世界とをつなげて考えるようになった」とか、「自分の生活と世界をつなげて考えるのがグローバルライフなのですね」と実感を込めて述べていた。1学期は問題と問題がつながっていることも、自分と問題とを結び付けて考えることもなかなかできない生徒が多かったので成長を感じた点である。そして、これが一度限りの授業ではなく、1年間を通じてじっくりと取り組んだ成果だと考える。

しかし、基礎科目として1年生に本科目を設置する上で配慮しなければならない点も見えてきた。それは生徒の生活経験の不足と幼さである。4月当初は、ほとんど中学生のような高校1年生という発達段階でどれだけのことを生徒が考えられるか授業者として不安もあった。だからこそ、生徒が自分の生活に目を向ける機会を多くつくことは欠かせない。また、体験を通じて実感し、知識と合わさって確かな考えが育まれる。今年度も調理実習の機会は一度だけだったが、日本の食文化の特徴を実感すると同時に日頃食事を用意してくれる家族に思いを馳せる、海外の人に良さを広めたいなど様々な思いが生徒の感想文から伝

わってきた。

1年を通じて学ぶ意義は大きい。しかし、この科目のみで地球市民性・グローバルシチズンシップを育むことができるのではなく、この科目で視野を広げるきっかけをつくり、様々な他科目、国際科目、行事と連携することで、豊かなグローバルシチズンシップを育むのだと考える。気づきから課題意識、課題発見、探究へと深みをもって生徒が成長するためにも、本科目はSGH基礎科目として、先述した科目目標をふまえつつ、他人事ではなく自分事としてとらえられるように工夫することが重要であると考ええる。

## 【参考・引用文献】

- ・ 建元喜寿ほか (2016). 「平成27年度文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業『先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成』(第2次報告書)」, pp.58-61. 筑波大学附属坂戸高等学校
- ・ 田中友紀子 (2015). 新科目「グローバルライフ」実践報告. 「研究紀要」第52集、pp77-81. 筑波大学附属坂戸高等学校

<授業概要>【資料1】

	学習項目	学習方法	学習内容
1 学期	グローバル課題を 生活をつなげて考える意義  私と世界を考える第一歩 ～私たちの暮らしから世界へ 目を向けてみよう～	科目ガイダンス(2H) 講義・アンケート記入  ①②講義・WSへ記入(3H)、 PC・スマートフォンなどで調べ学習(3H) ③PC・スマートフォンなどで調べ学習・ グループ発表(4H) ④講義・WSへ記入(2H) ⑤紙芝居・すごろく・フォトランゲージ (2H) ⑥⑦講義・WSへ記入(2H)	ガイダンス ・SGHって何?カリキュラム全体におけるGLの位置付け ・授業の進め方・取り組み方(学習活動・評価について) ・グローバル課題を生活から考える・私たちの生活と世界をつなげて考えよう ・この授業を通じて学ぶこと・考えてほしいこと(目標)  水から私たちの生活と世界を考える 1. ボトル水飲み比べ・ボトル水のCMから私たちの消費行動について考える 2. 生活に必要な水の計算～水汲みに行く少女と私の比較～ 3. 世界の水事情～世界の水問題を知り、共有する～ 4. 水をたくさん使っている肉は?～バーチャルウォーター～  パーム油から私たちの生活と世界を考える 5. 「ミナナの3代にわたるプランテーション農園での暮らし」 6. 私たちの身の回りにあるパーム油製品 7. パーム油と私たちの生活とのつながり・私たちにできること
2 学期	これからの私の衣生活 ～衣分野から 私の生活と世界との つながりを考える～	①講義・WSへ記入(2H) ②③相互インタビュー(2H)・講義(1H) ④講義・問題提起(0.5H)、 準備・立論(1.5H)、ミニディベート(3H) ⑤解説・講義・WSへ記入(2H)	私の衣生活と世界とのつながりについて考える 1. なぜ、服を着るのか?衣服の役割・着装 2. 私の服へのこだわり相互インタビュー 3. 私の休日ファッションショー:素材と原産国にも注目する 4. ファストファッションは私たちの生活に必要なか?不要か? ～ディベートを通じて考える～ 5. ファストファッションの光と影
3 学期	これからの私の食生活 ～食分野から 私の生活と世界との つながりを考える～	①好きな食べ物・嫌いな食べ物を グループ毎に相互発表(1H) ナングレン試食(1H) ②講義・WSへ記入(2H)  ③食事・バランスガイド・ PCソフト「タッキング自給率」でチェック (2H) ④⑤講義・WSへ記入(6H) ⑥一汁三菜献立調理実習(2H) ⑦講義・WSへ記入、 相互インタビュー(4H)	交流を通じて私の食生活・日本の食を考えるきっかけにする 1. インドネシア コルニタ高校留学生と交流～共通点と相違点～ 2. 交流準備・ふりかえり～インドネシアの食文化～  私たちの食生活を見つめる・日本の食文化を知る 3. 私の食生活チェック 4. 現代の日本人の食生活と変遷～栄養的特徴と食料自給率～ 5. 米の消費と生産の現状、米食を中心とした和食文化 6. 和食献立実習 7. 私たちの食料自給率と食品ロスの問題、世界の食糧問題 ①食料自給率と食品ロス、世界とのつながり ②食品ロス減らすには～フードドライブにチャレンジ:我が家の食品ロス～
	自分の生活を見つめ直す	①講演(2H) ②講義(1H) ③意見交換(1H)	私たちの食・日本の生活についてもう一度考える 1. 私たちの生活とつながる地球規模の問題 ～世界各国の人と交流、調査研究してきた人の話を聞く～ 2. 1年間の取組をふりかえる 3. これまでの学習をふまえて これからの私たちの生活、あり方について考える

調査①

調査②

調査③